

『經典余師』考

鈴木俊幸

1 四書ヲ平ガナニてざつと解申候

『經典余師 四書之部』初版付載広告に次のように見える。

經典余師 此書は上層うへのたむに誦法よみかたを平仮名にてしるし
下層したのたむに本文をあげて同じくひらかなにて初学の人に
ても聞えやすき様に注ちゅうしやく尺そよみ素読そよみ学問がくもんの暇いとまなき人又は
辺鄙へんびの師しに乏ちかしき地ちにても忽たちまちものしりとなる重宝ちゆうほうの
書也

名を用いて頭書に書下し文、本文に続けて双行で解釈を平易に記すという形式の経籍注釈書は、素読独習を可能とする画期的なものであった。『よしの冊子』二に次のような風聞が記録されている。

經典余師と名付、四書ヲ平ガナニてざつと解申候溪
大六(つひ)と申ス讃岐国ノ浪人儒者被召出候サタ御ざ候よ
し。右經典余師、奥筋ノ不学ノ人杯賞はいしょう罷仕候由。尤右
大六(つひ)此節御当地へ罷出逗留とちゆう仕罷在候由。

『經典余師 四書之部』には、この「誦法」について記す「凡例附言」が九丁あり、本書の利用の仕方が具体的かつ丁寧ていねいに示してある。広告文が繰り返し強調するように平仮

天明八年(一七八八)正月ころの記事と思われる。『經典余師』の著者溪百年(代六、世尊)については、『鳥取藩史第一巻』(一九六九年二月、鳥取県立鳥取図書館)

藩士列伝に一項備わる。その中に次のようにある。

初、世尊が經典余師を著はずや、幕府以為らく、聖人の書にまめ仮名を付して刊行するは、聖經を軽んずる所以なりと。因て之を江戸に召し將に罪する所あらんとす。世尊对ふるに、是れ吾老母の素読に便にし、且つ意義の解釈を容易ならしめんが為にせしのみ。敢て他意あるに非ずと。幕吏其の孝思に出づるの故を以て遂に之を問はず。

後代の編纂物にて、典拠も判然としない怪しげな記述であるが、『よしの冊子』の伝える風聞とやや符合する。いま、「召出」の事実を他に裏付ける術を持ち合わせないが、經書としては手軽な半紙本という書型で「四書ヲ平ガナニてざつと解」く師要らずの書籍は、その登場自体、「聖經を軽んずる」もの、これまでの教授法、学問伝統から逸脱するものとして、それなりに衝撃的であったのである。しかし、「衝撃的」と表現はしたが、その爆発的ともいえる流行、流布の様子に比して、じつは、『經典余師』という書名は、この当時も、またこの後も學者をはじめ識者たち

の言説にはほとんどのぼらない。著者の深百年にしても、近世期における評価はほとんど見当たらず、「逸脱」なりに学問の世界からは無視されていたに等しい様子である。近代になっても、思想史学をはじめ諸学による言及はほとんどない。古書店や古書展、また旧家蔵書にふんだんに見当たるにもかかわらず（見当たるがゆえにというべきか）『經典余師』という書籍についての研究もほとんど無い⁽²⁾。その存在についての認知は経験的にありながら、学芸史・思想史といった学問の射程には入って来なかったのである。さて、『經典余師』出版のタイミングは絶妙であった。寛政改革下の学問奨励という風の下、大いに重宝されたのである。「奥筋ノ不学ノ人杯賞甄仕候」というのもまんだら風聞のみではなかったであろう。『よしの冊子』十七の風聞記事、

小普請杯より学問の書上いたし候所、組ニより、聖堂とハ聖道と可書事也とセ話致申候も有之、南部主税支配杯ニてハ、經書ハ小学、史類ハ論語、經濟の書ハ近思錄とかけ杯と申候由。書出し候者甚困り候由。

などを真に受けると、幕臣の学問水準は慘澹たるものであり、『經典余師』のような書籍が、当座のにわか勉強に活用されたであろうことは十分に想像できる。

恋川春町作、寛政元年(一七八九) 蔦屋重三郎刊の黄表紙『鸚鵡返文武二道』は寛政改革下の世相をうがった作として有名であるが、その第十一丁表、武士が菅公(松平定信を擬す)作の『九官鳥』(『鸚鵡言』を擬す)を求めに本屋を訪れる場面がある。書入れに「学問の道、日々さかになり、孝弟忠信の道さかに行はれ、此御代に延喜式・延喜格の書も出でできにけり」などとあり、定信治世下の学問ブームを茶化している。ここに描かれたのは須原屋伊八の店頭で、「書林/すはらや/北沢/書肆」と書かれた出し箱があり、「菅公御作/秦吉了の言葉」「大学或問」「百年先生著/經典余師」の外題看板が下げられている。『經典余師』の流行ぶりをうかがうに足るが、これももてはやされるような学問状況をうがってもいるはずである。

山東京伝作画、寛政二年(一七九〇) 蔦屋重三郎刊の黄表紙『地獄一面照子浄玻梨』は小野篁地獄巡りの趣向で世相をうがった作品である。第八丁裏・九丁表は「暗闇地獄」の場面、無学文盲の罪人に読書の責苦を与えている。そこに

鬼の師匠について素読をしている亡者の「足下はこの頃出た經典余師を御覧じたか、恨むらくは間に合いますますの」という言がある。「足下」は川柳でもお馴染み、武士の使う言葉として類型化されている。『經典余師』が、「間に合います」るくらいの重宝な書として、不勉強な武士の間で話題になっていたのであろう。

『戲作京伝予誌』は、同年伏見屋善六刊の京伝作洒落本である。書名が「經典余師」のもじりであること言うまでもない。見返眉上には「寛政二庚戌新鐫」と記し、その下に「戲作四書紅毛天竺翻刻必究/京伝予誌/書肆 大觀堂」とあって、これも『經典余師』の趣を摸す。自序には「近來世に行る、經典余師と云書を聞に。塩梅よしのおでんより。上手をゆきたる美味にして。盲目の杖闇夜の堤燈。愚函な八兵衛をも明し。土手の八町をも照して。特に入の大門口に至らしむのはや監輿は。此にしくもの有べからず」とあり、これも、「愚函な八兵衛をも明」する至便の書としての『經典余師』流行を伝える。本文は「大学」「中庸」「論語」「孟子」をもじった「大業」「通用」「豊後」「申」の四章で構成される。『經典余師』は、まさに時の書として、もじりの対象となっているのである。

寛政二年鶴屋喜右衛門版の芝全交作黄表紙「遊妓じようぎ」遊妓じようぎとは卯角文字うまがくもじも、当時の仮名付経書の流行をうがった作であることは、すでに中山右尚「遊妓寔卯角文字」と「大学」に指摘がある。すなわち、「大学」の版面と本文のもじりを趣向とする「遊妓寔卯角文字」は、天明九年（寛政元年）正月鶴屋喜右衛門版の『大学平仮名附』、または『經典余師』の影響下にあることを指摘し、仮名付の経書の、寛政改革下の江戸における流行ぶりをうがとうとしたものであるとする。

このように改革の風は『經典余師』流行を煽った。しかしこれは一過の流行に終わることはなかった。『經典余師』は、その多くが明治に至るまで版・摺りを重ねていく。また、堰を切ったように『經典余師』の様式を模した平仮名付訓の書籍が開版されていく。『經典余師』、またその様式を借りた書籍群は寛政以後という時代を特色づける出版物と言つて過言ではない。

2 『經典余師』の出版状況

2・1 四書之部

『經典余師 四書之部』は、玉藻集館、すなわち溪百年の

蔵版で、天明六年（一七八六）に初版が刊行される。所見本は、いずれも第十卷（中庸卷）末丁表に蔵版記、裏に「京都書林 中川藤四郎／錢屋庄兵衛／武村嘉兵衛／勝村次右衛門／文台屋次良兵衛／大池次良右衛門／江戸書林 須原屋茂兵衛／山崎金兵衛／大坂書林 清水長右衛門／山口又一／森田伝兵衛／寺田吉九郎／柏原屋与左衛門」という売弘書肆一覽記事を載せるものである。初行「中川藤四郎」と中ほど「須原屋茂兵衛」、末尾「柏原屋与左衛門」の部分が入木である。これ以前の形のもの、つまりより初印に近いものが今後見つかる可能性がある。『割印帳』寛政元年西十二月廿五日割印の条に「天明六年六月／經典余師四書部 全部十冊 溪代録作 板元 京中川藤四郎 売出し山崎金兵衛」と見えるのは、「上組濟帳標目」の寛政元年西九月々同二年戌正月迄の条に「一 経、伝餘師四書之部 江戸添状之事」⁽⁵⁾とある記事に対応すると思われる。江戸売弘に際して中川がこれに加わったのであろう。

初版の柱刻上部が黒口であるのに対し、第二版以後は「經典余師」の書名がその部分に彫り込んであるのでひと目で識別できる。第二版は寛政六年（一七九四）の刊行である。蔵版記は変わらず（ただし、鳳凰の蔵版印のほかに

貝葉の印が加わる)、その裏面に「天明六丙午年六月原刻／寛政六甲寅年十一月再刻／大阪書林 柏原屋与左衛門／柏原屋嘉兵衛」という刊記を備える。初版の最末期の印と思われるものは、第十巻後表紙見返刊記に「浪華書林 柏原屋与左衛門／柏原屋嘉兵衛」と記すが、その前に「経典余師四書之部 全部十冊／同 小学之部 全部五冊／同 孝經之部 全一冊／同 四書序之部 全一冊／同 詩経之部 全部八冊」という広告を載せる。これは、「四書序之部」まで広告し、すなわち「詩経之部」の広告記事がなく、未だに「浪華書林 順慶町五丁目 柏原屋与左衛門」とあるものより印次が下り、詩経之部刊行の寛政五年(一七九三)四月ころのものと思われる。版木の摩耗による摺刷の荒れは相当である。初版の版木は、その耐用ぎりぎりまで摺刷に供されていたものと思われる。

『新版願出印形帳』第七冊に「一 經典余師 四書之部 再板 全部 十冊／作者 難波村 溪代録／開板人 順慶町 五丁目 柏原屋与左衛門(下略)」⁽⁶⁾という記事があり、末に「寛政式年戊四月」の年記が備わる。寛政二年には再版を企画せねばならぬほどの爆発的な売れ行きであったと思われる。『割印帳』寛政七卯年六月廿六日割印の条には「寛

政六年十一月／四書經典余師 全拾冊 溪代録著 売出し 西村源六 板元 大坂柏原屋与左衛門」とあり、江戸での売弘は出版翌年のこととなる。

第三版は文政七年(一八二四)刊で刊記は「文政七甲申年正月三刻／大阪書林 順慶町五丁目 柏原屋与左衛門」となる。『出勤帳』三十五番(文政七年正月十一日)には「柏原屋与左衛門より、經典余師四書之部、再板出来ニ付先例之通聞届、白板料請取添章相認候事」と見える。

第四版は天保十三年(一八四二)刊。刊記は「天保十三壬寅年二月四刻／江戸書林 日本橋通巷丁目 須原屋茂兵衛／大阪書林 順慶町五丁目 柏原屋与左衛門」で、『新版願出印形帳』第十九冊に、

覚

一 經典余師四書之部 全部十冊

右之書板行所持仕被在候所板行摩滅致候ニ付再板仕度 段願出候所御聞届被成下忝奉存候尤右再板仕候義ニ付 何方へも差構無之候然候上者元板通無相違再板仕候方 一 相違之義在之候ハ、年行司御衆中如何様共御取計可 被成候其外故障等出来候共御差図次第違背申間舖候為

後日一札仍而如件

天保十三寅年三月

年行司御衆中⁽⁸⁾

柏原屋与左衛門 [印]

天保十三寅年四再刻

嘉永五壬子年五再刻

と見え(『開板御願書扣』にも同様の記事あり)、これも版木の摩耗による再版であったことがわかる。

第五版は嘉永五年(一八五二)刊である。蔵版記の裏面に「嘉永五年／壬子正月五刻／三都／発兌／書肆 須原屋

茂兵衛／須原屋伊八／岡田屋嘉七／山城屋佐兵衛／勝村治

右衛門／河内屋喜兵衛／河内屋和助／秋田屋市兵衛／象牙

屋治良兵衛／柏原屋与左衛門／敦賀屋九兵衛／敦賀屋彦

七」という刊記を備える。また、文政版まで柱刻にあった

「玉藻集館蔵」という文字がなくなり、書賈版となる。

第六版は明治四年(一八七二)秋田屋市兵衛の刊行であ

る。『新板願出印形帳』第二十一冊に、

一 四書經典余師 全十冊 故人高松藩 著述者 谷百年

但 天明六丙午年原刻 再板人 秋田屋市兵衛

寛政六甲寅年再刻

文政七甲申年三再刻

外 五人

右之諸従来所持仕居候処板行致摩滅候ニ付再板仕度此段御願被下度願上候尤右再板仕候儀ニ付何方江茂差構無之候然ル上者元板通再板可仕候万一相違之儀等有之候ハ、年行司御衆中如何共御取計可被下候其外故障等出来候ハ、御差図次第違背申間敷候為後日仍而如件

明治三年六月八日

秋田屋市兵衛

年行司御衆中⁽⁹⁾

とある。『出勤帳』七十四番、明治四年正月十一日の条に

「秋市より、四書余師再板製本出来ニ付、上ケ本三部并ニ

席出本各部都合四部受取、白板歩銀差出、添章式通相認置

候事」、また同年正月二十七日の条に「上ケ本之品々、并

ニ新開板願出之品々、願書へ調印致し置候品々、左之通

(中略)○四書余師、右同断 秋市⁽¹⁰⁾とあるので、願出か

ら半年余で出来したものとされる。国立国会図書館蔵本

(139-250)によれば、刊記は「明治三庚午年十二月六刻官

許／三府発兌書肆／須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋

嘉七／須原屋伊八／勝村治右衛門／河内屋喜兵衛／山内屋五郎助／伊丹屋善兵衛／近江屋平助」となる。また摺刷年次不明で、「官許／書肆 東京 通り油町 水野慶治郎／大阪 心齋橋通備後町南へ入 小谷卯兵衛」という刊記を有するものも確認できる。

また、これらとは別に、文久元年(一八六一)には『増補經典余師』が出版されている。四書の各序をそれぞれの本文前に置いたもの、すなわち、『四書序之部』を取り合わせたものである。原序にしても本文にしても全く別版であり、本文には小異がある。⁽¹⁾ 原版にあった前付・後付はすべて無くなり、あらためて安政四年積翠陳人の序と「附言」を備える。刊記には「文久元年辛酉年細精改刻／江阪／書肆／発兌／須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／河内屋喜兵衛／炭屋五郎兵衛／豊田屋卯左衛門／象牙屋治郎兵衛／敦賀屋彦七／秋田屋市兵衛」とあるように江戸と大阪の版元が並んでいるが、版元は最後に記されている秋田屋市兵衛である。『安政紀元以後他国販売出添章證文帳』には「同年(文久二年)八月十六日／一 四書經典余師板元大坂秋田屋市兵衛／全拾冊／売出人 丁子屋庄兵衛⁽¹²⁾」とあり、京都では丁子屋庄兵衛に売弘を任せている。

天保十三年(一八四二)、本屋鍊次郎から『大学余師』中本一冊が出版されている。題簽は「大学余師 全」とし、柱刻魚尾上に「經典余師」の語がある。初二丁「凡例附言」に経書学習の意義、また読法を簡略に記し、本文は『經典余師』のものをそのまま用いている。刊記は「天保十三壬寅年四月／赤坂一ツ木町／本屋鍊次郎板」。本屋鍊次郎は、天保十四年に『野馬台詩余師』(中本一冊)も出版している。これには「天保十四癸卯年 赤坂一ツ木町本屋鍊次郎板」という刊記を削除したのもあるため、鍊次郎の出版事業は長続きしなかったものかもしれない。

また、半紙本一冊、黄檗色巾繫ぎ艶出表紙で、「大学余師 全」という題簽を備える大学巻のみの一本がある。見返には「讃岐溪百年先生述 翻刻／經典 大学之部 全／書肆学遊堂梓」とあって、その紅色料紙の様子などから明治期の印行と思われる。学遊堂については未詳であるが、後表紙見返に「山形十日町／荒井太四郎／製本之印」という印文の方形印が押捺されているので、山形で出来たものと思われる。前付一切を欠き、すぐに本文が始まるが、柱刻に「玉藻集館蔵」の文字があるので、天保十三年版以前のものに基づいてそのまま覆刻したものと思われる。

さらには、翻刻本と称するのが適当と思われるが、明治八年（一八七五）刊の銅版本、さらにその再版の明治十七年（一八八四）版を確認しうる。

2・2 孝経之部

『四書之部』に続いて開版されたのが『孝経之部』である。初版は、「四書之部出来 五経并忠経武経七書追々刻成／天明七丁未年十一月／皇都書林 山本長兵衛／淡海治良吉／東都書林 山崎金兵衛／前川六左衛門／浪華書林 荒木佐兵衛／山口又一郎／森田伝兵衛／清水長右衛門」という刊記を後表紙見返に有する。見返に「讃岐溪百年先生述必究／余師孝経之部 全／四書既に世におこなはれ今又此経を開板す五経小学武経七書等皆先生の解あり追々梓行せん事を冀のみ／浪華書林羣鶴堂蔵」という記事があり、柱刻下にも「群鶴堂梓」とあるので、刊記の末尾に記載されている清水長右衛門の蔵版である。『割印帳』寛政元年三月廿三日割印の条には「天明七年丁未年／經典余師孝経 全一冊 溪百年先生作 板元 大坂柏原屋佐兵衛 売出し 山崎金兵衛」とあり、柏原屋佐兵衛が他国への売弘を図っている。架蔵本には須原屋茂兵衛の仕入印があり、その脇の

符牒には「柏佐」の文字が見える。須原屋茂兵衛が柏原屋佐兵衛から仕入れた本である。『孝経之部』の出版には問題があったようで、『上組濟帳標目』天明八年申九月方酉正月迄の条に「一 經典余師孝経之部板出来ニ付大坂取合之事」、また、同九年酉正月ヨリ寛政元年五月迄の条には「一 孝経餘師出入相済売買之事」と見える。清水長右衛門版に遅れて京都版が出来、それが大坂書肆との間で出入の因となったものである。

この初版に基づき覆刻版が存在する。架蔵のものは、見返・凡例・刊記が無く、柱刻には「群鶴堂梓」とあるものの、題簽も含めて明かに別版で、元版主の合意のものとは思にくい。

第二版は文化六年（一八〇九）の刊行である。『出勤帳』二十四番、文化六年十二月五日の記事に「一 經典孝経之部、添章三通相認メ河太へ相渡事」「一 孝経よし再板、河太より願出候ニ付、聞届ケ候事」と見えるように河内屋太助の版となる。

文化十二年（一八一五）の刊記をもつ江戸版があるが、これは重版である。溪百年の序文を欠き、刊記を「文化十二亥年／五月吉日／東都 山盛堂板」とするほかは、ほぼ

文化六年河太版の覆刻となる。山盛堂の何ものであるかは未詳である。これと同版で、刊記部分を削去し、見返に「書肆 東易堂 山盛堂 梓」とあるのもあるが、東易堂についても不明である。いずれも、元版主に無断の出版であろう。これらとは別版かもしれないが、『出勤帳』三十九番、文政十一年(一八二八)二月二十日の条に「一河多より、經典孝経重板本持出、三都売留メ之義願出候事」、また同年三月廿日の条に「一江戸行司中へ、河太、經典孝経之売留メ書状相認メ候事、并ニ含英相合より韵府一隅さし構之口上書一統ニ申遣候事⁽¹⁴⁾」とあり、『孝経之部』の重版が取り沙汰されている。『上組濟帳標目』文政十一子正月より五月迄の条に「一孝経經典余師重板之義ニ付大坂行司より書状至来之事、并ニ河内屋太助殿口上書写売留之事」とあるのも、これに対応する記事であろう。複数の重版の存在は、本書の需要の高さを示している。

第三版は天保十四年(一八四三)に刊行されている。本文頭書末に「孝経読法終／天明七年／丁未十一月／刻／文化六年／己巳七月／二刻／天保十四年／癸卯九月／三刻」とあり、後表紙見返に「天保十四年癸卯歳九月再刻／皇都書林 出雲寺文治郎／東都書林 須原屋茂兵衛／浪華書林

河内屋仁助／河内屋大助」という刊記を備える。この第三版の版木は長く命を保ったようで、明治二十五年印本が確認できる(ただし、題簽および凡例と本文の一部は第三版の覆刻)。刊記は「明治廿五年四月五日再刻／発行者 大阪市東区安土町四丁目三十八番屋敷 鈴木常松／専売者 大阪市東区安土町四丁目拾一番地 積善館／専売者 福岡市博多中島町 積善館支店／印刷者 大阪市東区南久太郎町四丁目三番地 井上義助」となっている。

以上のように、『孝経之部』の版数は多いとはいえない。素読の入門書として圧倒的な需要のある経書であるだけに、そしてリスクの少ない手軽な分量のものであるだけに、重版や類似の注釈書が多く出回ってしまったことが大きかったであろう。

2・3 弟子職

『經典余師 弟子職』一冊は、溪百年の『經典余師』中唯一の江戸開版本で、天明九年に出版されている。見返に「讃岐溪百年先生述翻刻／經典余師 弟子職 全／東都書肆 高山房 申椒堂 梓」、刊記は「經典余師 四書之部 同 帝範余師／同 忠孝二經余師 同 孫子余師／同 礼記余師 同 小学之部／同 弟

子職 六書 追出／天明九己酉 東都書林 室町三丁目
須原屋市兵衛／本町三丁目 西村源六／日本橋通二丁目 小
林新兵衛となつてゐる（後表紙見返に小林新兵衛の蔵版
書目を掲げるものもあり）。『割印帳』寛政元年三月廿三日
割印の条に「弟子職經典余師 全一冊 百年先生作 板元
売出し 小林新兵衛 須原屋市兵衛」と見える。

本書はこの一版しか確認できていないが、見返の「山房
椒堂梓」の部分で「玉岳堂梓」と改刻した後修本（刊記は
同じ）があり、和泉屋金右衛門のちに求版したものと思
われる。本書は比較的現存が少なく、後修本にしても版面
の疲れはさほどないので、他の『經典余師』と比べてさし
たる部数は印行されていないであろう。このような需要の
低さが予想できる特殊なものであったからこそ江戸の本屋
が参入できたのかもしれない。

2・4 小学之部

『小学之部』十卷五冊の初版は寛政三年（一七九二）で
ある。刊記は「寛政三年辛亥夏六月／大坂書林 順慶町五
丁目 柏原屋清右衛門／同 柏原屋與左衛門／同 柏原屋嘉
兵衛」とあり、大坂の本屋の手になる。

『新版願出印形帳』第七冊に、「一 經典余師小学之部
作者 讚州丸亀 辻泰蔵／全部 五冊 開板人 順慶町五丁
目 柏原屋清右衛門／（中略）／寛政貳年戌二月」とあり、
辻泰蔵名義で手続きを行ったことがわかる。序には、既刊
のものについて「方_レ是時_ニ也。壯歳ノ虚飾未_レ除_カ。
妄_リニ録_ス姓氏_ヲ。今_ニシテ而深ク悔_ハ效_ヲ譽_ラ於名家_ニ」とあ
る。序末の署名も「野夫識」とあるのみであるのは名を伏
せたいがゆえのことであろう。「辻泰蔵」の名は、寛政五
年刊『詩経之部』の開版手続きでも使用されており、寛政
八年刊『孫子之部』では「作者 讚洲 浜千賀太」という名
前が使われている。実在した人間であるのかどうか両者と
も未詳である。

『割印帳』寛政四年正月十三日割印の条に「寛政三年亥
六月／經典余師 全五冊 大岡順和藤祐選 板元 大坂柏
原清右衛門 売出し 西村源六／墨付二百五十八丁 小学
之部」とあり、大坂にて出版されたあと、さほど時を置か
ず江戸で売り広められていることをもってしても、『經典
余師』人気のほどがうかがえる。初版にも版木の疲れた後
印本（架蔵本は第五冊末後表紙見返に「發行
書林／江戸日本橋
南宅丁目 須原屋茂兵衛／同 浅草茅町二丁目 同伊八／同

日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七
 ／同横山町三丁目 和泉屋金石衛門／同下谷池之端仲町
 岡村庄助／同芝神明前 和泉屋吉兵衛／同本石町十軒店
 英屋大助／京都三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州名古屋本町通 永楽屋東四郎／同同所 菱屋藤兵衛／大阪心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛」という刊記を備える)が確認でき、長く刷り出されていたことがわかる。

本書は文久三年(一八六三)に再版される。刊記は「寛政三辛亥夏六月／文久三癸亥歲再刻／江戸書肆 須原屋茂兵衛／岡田屋嘉七／山城屋佐兵衛／京都同 菱屋孫兵衛／浪花同 豊田屋卯左衛門／河内屋喜兵衛／河内屋和助」となる。「本渡帳」八月五日の条に「一小学經典余師 再版河内屋喜兵衛〔印〕／添章式通、願本共」⁽¹⁵⁾とある。

2・5 四書序之部

寛政四年(一七九二)には『四書序之部』一冊が出版される。見返に「余師四書の部既に世に行はるゝ事さかんなり人皆その序の足さるを恨む依て今その四序を梓に鏤はむといふ」とあるのをそのまま信ずれば、四書之部に省かれた各序についての要望が高く企画されたもの。刊記は

「経典四書之部 全部十冊／同 小学之部 全部五冊／同 孝経之部 全一冊／寛政四壬子年六月／浪華書林 柏原屋与左衛門／柏原屋嘉兵衛／鴻池屋卯吉／山口屋又一郎」となっているが、初丁柱刻下に「玉藻集館蔵」とあるので、百年の蔵版である。初版には、後表紙見返の刊記が無く、末に河内屋太助の蔵版目録一丁を備える後印本もある。

第二版は弘化三年(一八四六)刊である。見返眉上に「弘化三丙午」と記し、刊記は末丁裏に「弘化三年丙午五月／書林 江戸 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／大坂南久太郎町心齋橋通 河内屋又市郎／順慶町五丁目 柏原屋与左衛門」とある。『四書序之部』は都合二版のみではあるが、先述のとおり文久元年刊『増經典余師』にも序は収められている。

2・6 詩経之部

『詩経之部』八巻八冊は、都合二版を数える。初版は寛政五年(一七九三)刊で、巻末に「寛政五癸丑年四月／大坂書林 柏原屋与左衛門／柏原屋嘉兵衛」という刊記を備える。『新板願出印形帳』第七冊に、「寛／一經典余師詩経之部 全部五冊 作者 讚州丸亀 辻泰蔵／(中略)／寛

政三亥年二月 開板人 柏原屋嘉兵衛「印」／御行司中」と開版願書がある。『割印帳』寛政五年癸丑十月十五日不時割印の条には「寛政五年九月／經典余師詩経之部 全十冊 讚岐百年先生著 板元 大坂柏原屋嘉兵衛 売出し 西村源六」とあり、江戸でも寛政五年十月の売弘であった。第二版は嘉永二年（一八四九）の刊行で、「寛政五癸丑年四月刻／嘉永二己酉年四月再刻／江戸書林 日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／大阪書林 北久太郎町五丁目 河内屋喜兵衛／順慶町五丁目 柏原屋清右衛門／同町 柏原屋与左衛門」という刊記を備える。これには「発行／書肆／江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／京御幸町御池南 菱屋孫兵衛大坂堺筋長堀橋南詰 柏原屋武助／同心斎橋南一丁目 敦賀屋九兵衛／同安堂寺町 敦賀屋彦七／同堺筋大宝寺町角 豊田屋宇左衛門」や「発行／書肆／江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛／同浅草茅町 同伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同芝神明前 内野屋弥平治／同日本橋通二丁目 須原屋新兵衛／同室町二丁目 大坂屋藤助／京都三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州名古屋本

町通 永楽屋東四郎／大阪心斎橋通安土町 河内屋和助板」、また「発行／書林／江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛／同浅草茅町 同伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同下谷池之端仲町 岡村庄助／同芝神明前 和泉屋吉兵衛／京都三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州名古屋本町通 永楽屋東四郎／同同所 菱屋藤兵衛／同同所 菱屋平兵衛／大阪心斎橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛」という刊記のもの等種々の後印本を確認できる。また、「寛政三丙辰年改正／三都／書肆／江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／尾州名古屋本町七丁目 永楽屋東四郎／京二条東洞院 田中屋治助／大阪心斎橋安土町南エ入 河内屋和助板」という刊記をもつものもあるが、これは嘉永版と同版である。

2・7 孫子之部

『孫子之部』二卷二冊は、寛政八年（一七九六）の刊行である。刊記は「寛政八年丙辰年正月発行／大坂書林／山村九兵衛／渋川与左衛門／渋川清右衛門／泉本八兵衛／浅野弥兵衛／梶原嘉兵衛」となる。「寛政八丙辰年正月発行

／發行／江戸日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛／同芝神明前
 岡田屋嘉七／尾州名古屋本町 永楽屋東四郎／京都寺町筋
 三条西 丸屋善兵衛／全三条御幸町角 吉野屋仁兵衛／大
 坂心齋橋筋北久太郎町 河内屋喜兵衛／全唐物町南エ入
 河内屋太助」という刊記の後印本もあるが、一版しか確認
 できない。

『開板御願書扣』には「覚／一 經典余師孫子之部 七十
 一丁 全部二冊／作者 讚洲 浜千賀太／開板人 博労町 柏
 原屋嘉兵衛」と見える。⁽¹⁶⁾『新板願出印形帳』第八冊には、
 「覚／一 經典余師孫子之部 全二冊／(中略)／寛政七卯
 年十一月 柏原屋嘉兵衛「印」／御行司所中」とある。ま
 た、『出勤帳』十三番、寛政八年五月十八日の条には「一
 經典孫子之部、添章」とあり、他国売弘が許可されている。
 『割印帳』寛政八辰年五月八日不時割印の条には「同(寛
 政七年) 正月／經典余師 孫子之部 百年先生 板元 柏原
 屋嘉兵衛 売出 西村源六／同(墨付) 七十二丁」とあり、
 日にちが若干齟齬する。『出勤帳』の記事は江戸以外の地
 への添章についてのものであろう。

2・8 書経之部

『書経之部』六卷六冊は文化十二年(一八一五)の開版
 である。初版刊記は末冊後表紙見返に「文化十二年乙亥二
 月／平安書林 今村八兵衛／田中市兵衛／石田治兵衛／風
 月庄左衛門／東都書林 須原茂兵衛／浪華書林 渋川与左
 衛門／藤井六兵衛／柳原喜兵衛／森本太助」とある。また
 「發行／書林／江戸日本橋南壱丁目 須原屋茂兵衛／同浅
 草茅町 同伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝
 神明前 岡田屋嘉七／同同所 和泉屋吉兵衛／同下谷池之
 端仲町 岡村庄助／同本銀町三丁目 永楽屋丈助／同十軒
 店 英屋大助／京都三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州
 名古屋本町通 永楽屋東四郎／同同所 菱屋藤兵衛／大阪
 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛」という刊記を別冊に
 備えるものもある。『出勤帳』二十八番(文化十一年五月
 十一日)に「一 經典書経之部、河太より願出、吟味料受
 取置候、并願書認置候事」とある。⁽¹⁷⁾その願書は『新板願出
 印形帳』第十二冊に、「覚／一 經典余師書経之部 全部五
 冊／作者 因州鳥取 溪代録／開板人 唐物町四丁目 河内屋
 太助／(中略)／文化十一年五月 開板人 河内屋太助
 「印」／年行司衆中」と見える。また、『開板御願書扣』に

は、「同上(文化十一戊午七月)／經典余師 書經之部 全部五冊／作者 因洲鳥取 溪代録／開板人 唐物町四丁目 河内屋太助」とある。また、『出勤帳』二十九番、文化十二年二月廿日の条に「一 書經余師出来、添章三通河内屋太助へ遣ス、願本戻ス、白板料受取(中略) 一 書經經典余師／右上ヶ本書付認候事」とあるのは、他国売弘に関するものかと思われる。

本書は安政五年(一八五八)に再版される。刊記は「文化十二乙亥二月／安政五戊午正月再刻／平安書林 丸屋市兵衛／石田治兵衛／風月庄左衛門／東都書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／浪花書林 河内屋喜兵衛／河内屋太助／河内屋源七郎／河内屋和輔／柏原屋与左衛門／豊田屋卯左衛門」となる。「発行／書肆／江戸日本橋南壱丁目 須原屋茂兵衛／同浅草茅町 同伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同芝神明前 内野屋弥平治／同日本橋通二丁目 須原屋新兵衛／同室町二丁目 大坂屋藤助／京都三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州名古屋本町通永楽屋東四郎／大阪心齋橋通安土町 河内屋和助板」という刊記の後印本もある。『出勤帳』六十番、安政五年正月

十一日の条に「一 河和より、書經經典余師、再板願出聞届遣シ、印形取置候事」、廿日の条に「一 河和助より書經余師出来ニ付、廿四匁分白板請取、同出本壹部入、記帳相濟候事」と見える。また『安政紀元以後 他国版売出添章證文帳』には「經典余師書經之部 板元大坂河内屋和助／全部六冊 売出人 右同人(風月庄左衛門)」「印」と見えて、刊記に見える風月庄左衛門が京都の売弘手続きをしていることが確認される。

2・9 易经之部

『易经之部』七卷七冊も都合二版を数える。初版は文政二年(一八一九)の開版で、刊記は「文政二年己卯十一月 発兌／書林／京都 勝村治右衛門／江戸 須原茂兵衛／全伊八／大阪 渋川与左衛門／浅野弥兵衛／柳原木兵衛／岡田儀助／森本太助」である。これにも「発行／書肆／江戸日本橋通壱丁目 須原茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／同二丁目 須原屋新兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同芝神明前 和泉屋吉兵衛／同両国横山町壱丁目 出雲寺方治郎／同浅草茅町二丁目 須原屋伊八／大坂心齋橋通 北久宝寺町 河内屋源七郎板」という刊記のものなど後印本を

いくつか確認できる。

『出勤帳』三十二番(文政二年二月五日)に「一右同人(河内屋太助)より、易経經典余師、願本指出候ニ付、相改候様申聞候事」、同三十三番(文政二年十月五日)に「一右同日五つ時、天満組惣会所/周易經典余師 開板人河内屋太助/秀吟発句集 同 藤屋善七/東御奉行様御免」とあり、さらに同三十三番(文政三年二月五日)に「一經典余師易経、上ヶ本書付相認ル」と見え、開版手続きの流れをたどることができる。『新板願出印形帳』第十三冊には「寛/一周易經典余師 全部七冊/作者 因州鳥取 溪代録/開板人 唐物町四丁目 河内屋太助/右之書文 政二卯年二月奉願上 同年十月奉御奉行様御免被為 仰付 難有奉存候所此度序文式枚跋文式枚都合四枚相増并ニ題号 經典余師易経之部与仕板行仕候処十一日作者より申出候間 何卒御願上可被下候万一方より差構申出候共年行司衆中 御差図次第違背申問敷候為後日仍而如件/文政二卯年十一月 開板人 河内屋太助「印」/年行司衆中」とあり、「周易經典余師」の書名で開版手続きを進めていたものを、「經典余師 易経之部」と改め、序跋を付加して出版することになったことがわかる(『開板御願書扣』にも同様の記

事がある)。

第二版は嘉永元年(一八四八)刊である。刊記は「嘉永元戊申三月再刻/書林 京都 勝村治右衛門/江戸 須原茂兵衛/全伊八/山城屋佐兵衛/大阪 渋川与左衛門/柳原木兵衛/岡田儀助/森本太助」となる。同版で「発行/書肆/京都三条通御幸町 吉野屋仁兵衛/東京日本橋南巻丁目 須原屋茂兵衛/同通二丁目 山城屋佐兵衛/同所 須原屋新兵衛/同芝神明前 岡田屋嘉七/同 同所 和泉屋市兵衛/同西国横山町三丁目 和泉屋金右衛門/同下谷池之端仲町 岡村屋庄助/尾州名古屋本町通 永楽屋 東四郎/同 同所 万屋東平/同 同所 菱屋藤兵衛/同所 菱屋平兵衛/大阪心斎橋通安土町 河内屋喜兵衛」という刊記のものもあり、この版本で明治期まで摺刷されていたことがわかる。

2・10 近思録

『經典余師 近思録』十四卷五冊は天保十四年(一八四三)、河内屋太助の刊行である。「天保十四癸卯歲正月発兌/三都/書林/京都三条通堺町西へ入 出雲寺文治郎/江戸日本橋通老丁目 須原屋茂兵衛/大阪心斎橋通唐物町南

へ入 河内屋仁助／同全南久宝寺町北へ入 河内屋直助／同全通唐物町南へ入 河内屋太助」という刊記の一版しか今のところ確認できない。『出勤帳』五十一番（天保十年八月五日）に「一河太より、近思録余師願出候ニ付、相改願書相認め、定法通り印形取、吟味料請取候事」、また、天保十年十月廿五日の条には「一河太願近思録經典、河源願導窺私録、右式品願御免下ル、行司加善供、願人兩⁽²²⁾」とあり、出版願から刊行まで数年を要していることがわかる。

3 「余師」の時代

『經典余師』は、四書之部を筆頭に、尋常ならざる量の発行部数であったことがその版数から推測しうる。

天保三年（一八三二）に出版された『傾城情史 大客』（関亭京鶴作、京都田中專助版）は『經典余師 大学』のバロディである。洒落本的な内容の戯作には珍しい半紙本という体裁は『經典余師』を摸してのもの。見返に「此書ハ百年先生の經典余師にならひ」とあるように、自序や附言、また本文も「大学」本文をもじった漢文に双行の割注を付けて、『經典余師』本文様式の再現を図った枉解物で

ある。平仮名付訓漢籍注釈書の代名詞的な存在として『經典余師』が認識されている状況下にあって成立した戯作である。

為永春水作漢齋英泉画『意見早引大善節用』は、早引節用集の様式を模した通俗教訓書である。天保十四年山崎屋清七による刊行で、口絵に山崎屋清七の店頭を描く。ここに「四書注解 全部」（増）補早引節用集 全一冊「經典余師 新刻校合」という三枚の外題看板が描かれている。山崎屋は嘉永の間屋再興時には書物問屋に加入しているが、天保期よりもっぱら往来物の出版を行っている本屋である。店の前には「海上安全」とか「大坂□町／河内屋□兵衛」とか書かれた船荷が積まれており、上方出来の書籍の江戸流通に力を入れている様子が見てとれる。『經典余師』の刊記には顔を出さない本屋であるが、他の二点同様、山崎屋が扱うに相応しい、安定的な売れ筋の書物の代表として『經典余師』の書名がここに掲げられているのであろう。『經典余師』の浸透ぶりがうかがえよう。

甲斐国下井尻村の地主であった依田家の文書に『書物貸借控日記帳』がある。寛政九年（一七九七）十二月の年記が表紙に備わり、依田宗二（茂矩、寛保三―享和元）の同

年八月からの貸借分と、その十二月二十五日返却の記事から、書籍の貸借が記されている。十一月に、『知新弁疑』、『齊家論』、『經典余師 四書之部』のうち孟子四巻の三点を借用している。十二月にこの三点を返却するとともに、『道二翁道話』二巻と『經典余師 四書之部』のうち大学巻とを借用し、『安山(不門)』二巻と『道二翁道話 二編』を貸している。『四書之部』と『四書序之部』は、寛政十年二月に自身で購入している。他に貸借されている書籍に『翁問答』があり、依田茂矩とその周辺の人間の読書の対象となっているのはいずれも心学書や教訓書である。『經典余師』はこれらと一連の読書対象となっている。経書の世界に分け入ることによって確固たる倫理的指針を獲得し、地域における指導的立場を確保していこうという目的的な姿勢をここに読みとってよいように思われる。

寛政期を過ぎたころより、村落指導者層以外にも素読が流行し始める。⁽²⁵⁾そしてその好学の風潮と連動して、地方への、また地方における書籍流通網が開けその密度を増していく。『經典余師』のような、自学自習の具は、新たに張り巡らされていく書籍流通の回路に乗って隔々にまで流れしていくに相応しい書籍である。そしてこのような書籍の開

発が地方・階層を超えて、前代には無かった書籍需要を喚起していったはずである。

また、さまざまな漢籍が「余師」の形式を借り、また「余師」を主題にうたって刊行されていく。四書で確認できたものは、『經典余師大学講釈』(中本一冊、山崎美成著、弘化四年和泉屋市兵衛求版)、『論語余師』(『中庸余師』(中本、嘉永四年瓜生氏藏板)、『四書講釈』(中本十巻十冊、嘉永六年文昇堂版)。明治になってから藤岡屋慶次郎が出版した『論語余師』と『中庸余師』もある。いずれも漢百年の関与はまったく無い。また、『唐詩選和訓』(寛政二年、小林新兵衛版)、『經典余師 蒙求之部』(文政八年、河内屋太助版)、『古文後集余師』(文化八年、梅村伊兵衛等版)、『古文前集余師』(天保七年、大谷仁兵衛等版)、他に『略解千字文』(寛政、蔦屋重三郎版)を始めとして「千字文」や「三字経」などの平仮名付訓の注釈書が数多く出版されていく。また「実語教・童子教」や「庭訓往来」のような往来物として親しまれてきた本文の注釈書など、素読の材となりそうなものはほとんどその対象となっている。「余師」、また「經典余師」という名称は、平仮名付訓注釈書のある一定の様式を指す普通名詞となっていく。

聖教を「平ガナニてぎつと解」くということについての『經典余師』に対する憚りは、学者はともかく大方の利用者にはもとよりほとんどなかったであろう。先の依田家の蔵書目録にも購入した『經典余師』が記載されている。岡田村役人寺沢直興の蔵書目録である『書物目録』（文化元年正月）には「溪百年先生述／一 經典余師孟子 中庸 全部十冊／溪百年先生述／一 經典余師孝経 全一冊」と見えるなど、蔵書目録に著録されている例は少なくない。手習塾や家塾を経営する人間もこの書の便宜に浴している。たとえば、上州原之郷村で手習塾九十九庵を開いた三代船津伝次平(27)『家財歳時記』の「諸本覚」は書籍の購入記録であるが、「西（嘉永二年）春／一 詩経余師 拾五匁」、「巳・安政四年）／一 三百文 四書序余師／（中略）／一 書経余師 拾式匁」、「西・文久元年）／一 古文前後集余師 金壹分ト百文」という記事を見つけることが出来る。伝次平は、白文の経書も購入しており、素読の「正解」を簡便に得るための重宝として『經典余師』を利用したかと思われる。また、桐生新町の組頭役で、潺湲舎という私設図書館を設立した文人長沢仁右衛門の蔵書目録『書籍目録 潺湲舎／文政二年三月』には「經典余師弟子識孝

経之部 式本(28)と見える。他にも信濃豊科で私塾「実践社」を開いた藤森桂谷のもの（豊科町郷土博物館所蔵）など、地方の手習・素読師匠の旧蔵書にも『經典余師』は豊富に含まれている。

世田谷領第十代代官大場弥十郎の著した『県の礎』巻之三に「和泉村久離致候甚蔵掃村取計記」という記事がある。それによると、近隣子弟の教育に情熱を注ぎ、『道目脩編』（文政十一年刊）等の著作を著した小町雄八は、はじめ甚蔵といい、ばくちや盗品売買などを行う「不身持」なやからであった。寛政七年（一七九五）、二十一才の時、村を出奔、江戸に出て亀田鵬齋のもとで飯炊き奉公を行う傍ら手跡や素読の稽古に励み、菊地五山や大田錦城に入門するなど学問の研鑽に努める。掃村を許され、儒者として身を立てるようになって小町雄八と改名した。同記には、「一体村方ニ而博奕等携り候頃ニも唐詩撰或は仮名本之類不絶懐中之由風説ニ聞」とある。「仮名本之類」が平仮名付訓の経書であるかどうか断言は出来ないが、彼の素読学問成就の下地を形成した自学自習の具として「唐詩選」と並べられているところから、その可能性は低くはなからう。

天保十二年（一八四一）から太子堂村で髮結渡世をして

いた斎藤常次郎寛齋は、文久元年(一八六一)より討幕運動に参加、慶応三年(一八六七)薩邸浪士隊に加わり、翌四年には赤報隊結成時に加盟している。相楽総三ら幹部が偽官軍の汚名のもとに下諏訪で処刑された際、寛齋は追放処分となり、世田谷中馬引沢にて、相楽の遺言にしたがって郷学設立運動を開始、五百両の資金を集めて太子堂村に郷学所を設立する。まさに幕末維新の激動を地で行ったような人生である。その寛齋の著『夢の浮橋千代の里』に、自身の教養形成について語っている部分がある。

吾幼年々孤徳の身ニてしらす／＼懸而賤キ髮結賤を業
 といたし、聖賢之教を学ひ、昔しをも知り度、今日の
 家職に追れ、師道も求むる事を得ず、是を悲ミ、たつ
 きのひまニかなつきの本をよミ纒か和漢の書ニ身ヲよ
 せ独学流、随而職たくされとも、古今之盛衰を見つ、
 ……⁽³¹⁾

「たつきのひまニ」読んだという「かなつきの本」は、まさに『經典余師』のような平仮名付訓の経書と考えてよからう。『増訂經典余師』(文久元年) 附言「読書の大意」に、

今この書は学庸論孟の四書をしてその読法を輒く知り
 且その文意大略を幼きものに知らせんと国字を附し
 て辺鄙山家師に乏しき郷にてもこの一本を座右に措き
 常に熟読する時は聖人賢者の旨を曉り身を脩め家を
 齊へ万の義理を明らかに物に惑はざるの大本となす
 実に宇宙第一の書志あらん児童は懈らず熟視すべ
 し

とあるような歌い文句をそのまま実践したような事例である。素読の師を家業に支障をきたさない範囲で見つけることができない場合、自学自習の学問が行われることが珍しくない時代がおとずれている。その際に必要とされる書籍としてもっとも行われたのが『經典余師』であり、『經典余師』は、さらにその様式を範とした一連の「余師」の登場をも促した。これらの流行ぶりは、近世後期、ますます地域・階層を超えて広範囲に厚みを増していった素読、学問への志向をそのまま物語っているであろう。潜在的な需要に応えたとと思われる『經典余師』の登場は歴史の必然であったと言えるかもしれない。そしてこの平仮名付訓の平易な経書注釈という発明は、より高次の自己を獲得しよう

という意欲の醸成、民間レベルの知の広汎なる底上げに大いに寄与したはずである。

- (1) 『隨筆百花苑 第九卷』(一九八二年一月、中央公論社)。
- (2) 高井規行「溪百年とその思想」(日本思想史研究会編『日本思想史への試論』、みしま書房、一九九八年三月)がその僅少な研究のひとつである。
- (3) 『共立女子大学短期大学部紀要』二二号(一九七八年二月)。
- (4) 『^{字保}以後江戸出版書目―新訂版―』(一九九三年二月、臨川書店)による。以下同じ。
- (5) 『京都書林仲間記録 五』(一九七七年二月、ゆまに書房)。
- (6) 『大坂本屋仲間記録 第十四卷』(一九八九年三月、清文堂出版)。
- (7) 『同 第三卷』(一九七七年三月、清文堂出版)。
- (8) 『同 第十五卷』(一九九〇年三月、清文堂出版)。
- (9) 同右
- (10) 『同 第七卷』(一九八五年三月、清文堂出版)。
- (11) 前掲「溪百年とその思想」に「大学」巻の異同一覧がある。
- (12) 『京都書林仲間記録 四』(書誌書目シリーズ五、一九七七年一〇月、ゆまに書房)。
- (13) 『大坂本屋仲間記録 第二卷』(一九七六年三月、清文堂出版)。
- (14) 『同 第三卷』。
- (15) 『同 第十卷』(一九八三年三月、清文堂出版)。
- (16) 『同 第十六卷』(一九九一年三月、清文堂出版)。
- (17) 『同 第三卷』。
- (18) 『同 第十四卷』。
- (19) 『同 第五卷』(一九八〇年二月、清文堂出版)。
- (20) 『京都書林仲間記録 四』。
- (21) 『大坂本屋仲間記録 第三卷』。
- (22) 『同 第四卷』(一九七八年二月、清文堂出版)。
- (23) 近世中後期の依田家について、また「浪人」という身分については、山本英二「浪人・由緒・偽文書・苗字帯刀」(『関東近世史研究』二八号、一九九〇年五月)、同「甲斐国「浪人」の意識と行動」(『歴史学研究』六一三号、一九九〇年一月)に詳しい。
- (24) 国文学研究資料館史料館編 史料叢書1『近世の村・家・人』(一九九七年三月、名著出版)。
- (25) 「地方書商の成長と書籍流通―信州松本書肆高美屋甚左衛門を例に―」(『歴史評論』六六四号、二〇〇五年七月)

月)。

(26) 『長野県教育史 第八巻 史料編二 明治五年以前』(長野県教育史刊行会、一九七三年三月)。

(27) 清水照治「長沢仁右衛門と私設図書館游濠舎」(『桐生史苑』四〇号、二〇〇一年三月)に翻刻がある。

(28) 高橋敏『近世村落生活文化史序説』(一九九〇年七月、未来社)に詳しい。

(29) 『世田谷区史料 第五集』(一九七四年三月、東京都世田谷区)、『世田谷区教育史 通史編』(一九九六年三月、世田谷区教育委員会) 森安彦執筆担当部分による。

(30) 『世田谷区教育史 通史編』同右。

(31) 『世田谷区教育史 資料編一』(一九八八、世田谷区教育委員会)。

(中央大学教授)